

まず、東京についてすぐに訪れた新日鐵住金でのディレクトフォースについてだ。オフィスのあるビルについては、やはり東京の中心部に位置する大企業のオフィスであることが一目でわかるようなものだった。某バラエティー番組でよく企画している企業・工場見学などに出てくるようなところで、改めて、とんでもない企業に来ているのだ、と思った。

社員の方と話し合ったことについてだが、私は部活動との両立の仕方について尋ねた。社員の方からの答えは「できると信じるのが大切。そう思わない限り絶対にできない。」というものだった。その答えに対し、私は少々の反感を持った。もともと精神論が嫌いであったことが主な理由だろう。しかし、その後の具体的な対策については、「電車の中での時間を有効活用する」、「生活の中でできることを探し、時間を無駄にしない」などごく普通のことだったが、一流企業の社員の方がおっしゃることで、逆に説得力が増していたように思えた。その時は、実行するつもりだったが、私はいまだそのことを実行に移せてはいない。

そのほかに、仕事をするにあたって大切なチームワークについて、高校生活でどのようにして身に着けるか、国際的なニーズをすり合わせていくテクニック、世界に通用する英語のレベル、などについて話し合った。チームワークについては、やはり部活動が大切だ、という話だった。私は水泳部に所属しており、水泳は基本的に個人競技だ。しかし、同じ学校の仲間などと、自らたてた個人的な目標を集約したチーム全体としての目標をたて、それに向かってチームで努力する、ということを行うことでチームワークを養えるのではないかと考えた。この課題については、実行に移せそうだ。他の二点については、私の手におえる議題ではなくまだその域に達していないためほかにすべきことを探そうと思った。

ディレクトフォースではなかなか有意義な話し合いをすることができたと思う。しかし、質問の作成などの準備が不足していたり、消極的になってしまったりしたため、あまり深いところまで追求することができなかったと思った。

企業大学訪問では、私たちは柏にある東京大学宇宙線研究所を訪問した。この訪問先は、班で決めたのだが、私の意見は班の中では通らず、また、提案されたものが班の分野とは異なるものだったため、私の興味のある分野とはかけ離れていた。しかし、行ってみるとなかなか面白い研究をしているところで、それなりに有意義な時間を過ごせたと思う。東京大学宇宙線研究所はニュートリノや素粒子の研究を行っているところで、ハイパーカミオカンデやCTA（チェレンコフ望遠鏡アレイ）の開発にも携わっている。私たちが訪ねた中嶋大輔特任助教はCTAのカメラ部分の部品の開発を担当していた。私はその分野に精通しているわけではないので、その研究がどの程度すごいものなのか話を聞いただけではわからなかったが、実際に望遠鏡の部品である2mもある鏡を見せてもらったときに、なんとなくそのすごさというものが分かった気がした。

中嶋先生との話では、おもに研究者としての心構え、やりたいことの探し方など精神的なことを質問した。特に、私はまだ将来やりたいことがはっきりしておらず、進路についてもあいまいにしか希望を持っていないそのため、実際に世界の最先端の研究を行っている先生に、そのことについて尋ねることで何らかのヒントを得ようとした。しかし、中嶋先生はフィーリングでやっている部分が多く、感覚的な回答がほとんどだった。そのなかで、海外とのかかわりを多く持つ先生は、洋画を多く見るといいとおっしゃっていた。なにやらあっちのことがよくわかるらしい。また、実際に海外に旅行しに行くこともいいとおっしゃっていた。先生に質問したことからは得られたことは少なかったが、世界の最先端の研究を行っている施設を見学できたことは、とても大きい経

験になったと思う。移動が大変だったが、なかなか楽しかった。

ホテルに帰ってから行われた OBOG との懇親会についてだが、私ははじめあまりこの企画を楽しみにはしていなかった。なぜなら、東大などのトップに入る人は何かやはり違うものを持っていて、自分とは決定的に違うことをしており、それを自分に真似することは不可能であるという固定観念を持っていたからである。しかし、実際話を聞いてみると、とんでもなく優秀であるという点を除けば、我々と何も変わらぬ(元)二高生であった。

三回に分けて行った懇親会だが、一回目二回目は、あまり具体的な話はできなかった。漠然と一年生のうちから頑張っていたほうがいい、などの話をした。やはり、二年生になってから、部活が終わってから、などの甘い考えでは通用しないのだなあ、と思った。

三回目、自分で自由に移動してよい時間になり、私は元水泳部だ、と言っていた斎藤自快さんのテーブルへ移動した。彼については、東京へ出発する前に、顧問である岩淵先生に話を聞いてみるといい、と言われており同じ水泳部で同じような時間のない中で生活していた斎藤さんのところで話を聞きたいと思っていた。斎藤さんはかなり独特な生活スタイルをしていて、学校が終わったら、クラブの練習が始まるまでずっと遊んでいたそうだ。彼は、遊ぶ時間の確保はとても大切なことだとおっしゃっていた。遊びは人間性を豊かにする、遊べない人間はつまらない、とおっしゃっていた。私はその言葉が深く印象に残った。私は今、うまく遊ぶ時間を確保できるとは言えない。そのため、斎藤さんの話を聞いてたまにはちゃんと遊ぼう、と思った。また、彼も他の東大生と同じように勉強もしっかりとこなしていたようで、朝一時間、夜練習後に一時間と遊びと同程度の勉強時間を確保していた。けじめはしっかりとつけていた点も見習いたいと思った。なにより印象深かったのが、「バカなことをして東大に入る」というセリフだ。その言葉が私の中学時代と重なったのだ。中学の頃東大を二高に置き換えて同じようなことを考えていた。そのため斎藤さんが言ったことがなんとなく理解できたのだ。斎藤さんの話は、同じ水泳部であり、クラブで練習をしているという点で、私とかなりの共通点があり、今後の私の生活の改善のために大いに参考になった。

東大のオープンキャンパスでは模擬講義などの事前登録ができず、見るができなかった。準備不足を痛感した。模擬講義を受けることや、研究所を見学することはかなわなかったが、日本一の大学である東京大学の雰囲気味わうことができた。東京大学には案外縁が多いこと、日本一とはいっても東北大とはさほど変わらない雰囲気であることなどの発見があった。外面というのはあまり変わらないものだなあと思った。

私は、東大研修に行く、と言われても最初ピンと来ていなかった。なぜなら、東京大学は私にとって雲の上の存在であり、とても自分が足を踏み入れるようなところではないと思っていたからだ。また、格上過ぎて狙う気もなかったことも理由の一つだ。しかし、その研修に行くことを決めたとき、私はその大学を狙うことができる位置にいるのだ、ということを改めて実感した。この仙台二高という場所がそれだけ恵まれた場所だということも感じた。しかし、今回の研修では準備不足や消極的になってしまったことが原因で貴重なチャンスを生かしきれなかったように思えた。この点はしっかりと反省したいと思う。そしてこの研修で得られたことを、今後の糧として、有意義な高校生活を過ごしたいと思う。